

巻頭言

東京オリンピックイヤーに思うこと

徳島赤十字病院 看護部長 庄野 まゆみ

令和3年は、半世紀ぶりに東京オリンピック・パラリンピックが開催されました。開催地決定の瞬間を皆さま覚えていらっしゃるでしょうか。「おもてなし」の一言が日本人の心意気と評されました。しかし、新型コロナウイルス感染症の世界的流行により、異例の1年延期、無観客での開催となりました。そんな中でしたが、たくさんのアスリートにより、オリンピックでは過去最高の58個のメダル獲得という素晴らしい記録が残されました。続いて行われたパラリンピックにおいても、51個のメダル獲得となりました。輝かしい記録には、選手個々のたゆまぬ努力もさることながら、競技に関連する様々な技術の開発、進歩があります。

医療の現場においても、目覚ましい進歩があります。近年ではiPS細胞を利用した治療やロボット支援手術に代表されるような、半世紀前には考えられなかった治療ができるようになりました。iPS細胞の活用は、医学界にとって画期的なものとなりました。これは、医療に関わる人々のたゆまぬ努力の成果であると考えます。一方、昨年引き続き、デルタ株からオミクロン株へと変異した新型コロナウイルスが世界中で猛威を振るっています。

こうしたウイルスとの闘いは、ウイルス発見当初から始まっています。新型コロナウイルスに関しても同様です。医療の現場では患者を救うべく日々努力し、研究機関や製薬会社では、ワクチンや治療薬の開発に心血を注ぎます。それらの知見を集約することで、これらの戦いを乗り越えてきました。早く、新型コロナウイルス感染症にも打ち勝ちたいものです。医療の発展には、こうした研究や治験の積み重ねが必要不可欠です。

今年度も、臨床においてたくさんの研究活動がなされ、ここに15題の論文が集まり、院内医学雑誌第27巻として発刊にいたることができました。業務多忙の中、投稿いただいた皆さまに感謝いたします。これからも多くの臨床研究や症例報告がなされ、未来の医療の発展に寄与することを願います。

